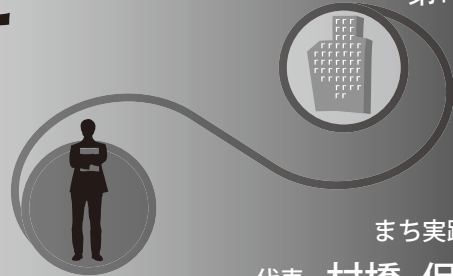


地方自治体とイかに 連携するか

～地域振興への次なる取組み～

オホーツク北見の可能性
—地域経済支援のあり方—



まち実践社

代表 村橋 保春

売出し中 オホーツク北見

ご当地番組の人気は根強い。ご当地ならではのグルメや景勝地、方言や祭など話題に事欠かない。たとえばお雑煮。すまし汁に味噌仕立て、あずき汁を用いる地域もある。角餅に丸餅、果ては餡餅、焼くか煮込むか。具材に至っては郷土の特産物に自慢合戦。もって日本は多様性に満ちていると蒞蓄家は悦に浸る。

考えが甘い。この程度では日本の多様性を語り切っていない。縄文時代—弥生時代—古墳時代といった教科書定番の歴史変遷ではなく、縄文時代—続縄文時代—擦文時代という歴史を持つ地域が日本にはある(注)。海を隔ててナーナイ、ウリチ、ニヅフといった多様な民族と交易をした地域がある。ほたての味の違いから採れた浜の名前を言い当てる美食家の住民が多い地域がある。見聞きするものも多くが初体験、新知識のオホーツク地域である。

北海道を憧れの地として訪れ

る観光客は多い。札幌の雪まつり、函館の夜景、富良野のラベンダー、旭川の旭山動物園、釧路の湿原など、魅力ある観光スポットは枚挙にいとまがない。いずれも外国人観光客の数が増え、北海道新幹線効果も良好に推移している。そんななかで、オホーツク地域は北海道の旅行通であつても新鮮味を感じる未開拓地と言っている。

多様性と新鮮味に溢れるオホーツク地域の魅力をしっかりと発信し、観光振興につなげようとオホーツク地域の六商工会議所が連携して協議会を設けた。北見商工会議所が事務局となり、事業者、会議所職員の方々が知恵を絞って実践につながる検討を進めている。

玉ねぎ、ほたて、白花豆など日本一の食材に恵まれ、天然ハッカは世界7割のシェアを誇った歴史もある。流水観光や極寒期の野外焼肉まつりなど寒さを活かしたイベントも数多い。世界遺産知床、美幌峠、サロマ湖、清水原生花園など絶景スポットに恵まれている。快

適な夏は大学や社会人のスポーツ合宿で賑わう。観光に関わるポテンシャルは十分にある。それをいかに情報発信し、具体的な集客につなげるか、協議会の検討成果に強い期待がかかる。

北見商工会議所—オホーツク発展の要として

オホーツク地域はおおむね北海道オホーツク総合振興局の行政エリアをいい、18市町村で構成される。総面積は1万平方キロを超え、都道府県別面積と比較すると秋田県に次ぎ7位に位置づけられる。北見市は同地域内で最も人口が多く歴史的にも経済的にも中心的都市である。

北見商工会議所はリーダーシップをもって同地域の経済界の発展に努めている。同会議所小原光一専務理事、渡邊伸一理事・事務局長を訪問し、オホーツク地域及び北見市における現状と展望についてお話を伺った。北見市をはじめオホーツク地域は第一次産業が中心的基盤を形成しており、日本一の生産量・漁獲量を誇る玉ねぎ、白花

豆、サケ・マスなど基軸となる特産品がある。生産者の高齢化、後継者確保難など課題もある。このため、第二次・第三次産業の成長発展に力を入れ、6次産業化の推進が求められる。特に第三次産業の基盤強化が必
要と考える。

オホーツク地域及び北見市の発展のためには人材の確保が喫緊の課題である。後継者不足は第一次産業にとどまらず、第二次・第三次産業でも同様である。北見市内には北見工業大学があるが卒業後オホーツク地域にとどまるのは4%ほどである。青春の勉学の地での活躍を望む学生に対して地域産業界からの情報発信が不十分であり、北見商工会議所では六商工会議所間で包括連携協定を締結し、地元企業による就職説明会を積極的に開催している。

既存企業の経営発展や創業を支援する組織としてオホーツク産学官融合センターがある。同センターは北見商工会議所をはじめ、北見市、北見工業大学、中小企業基盤整備機構、北海道

経済産業局、地元金融機関などが連携して、経営課題を抱える企業に対してワンストップで問題解決支援を行っており、相談窓口は、北見工業大学社会連携推進センター内にあり、各機関との連携を図り、企業経営とコミュニケーションをとり支援を行っている。また、地域課題となっている事業所数の減少に伴う地域力の低下対策として創業支援に力を入れている。

まちづくりについても注力している。北見市は中心市街地をJR駅前から市庁舎・赤十字病院にかけて2拠点1軸となる都市再生整備計画を構想している。対象エリアには中心商店街も位置し、賑わいの原動力となることが期待される。北見商工会議所では北見市、地域産業者と連携して商業活性化委員会を設置し、事務局として運営取りまとめを行う。若者をはじめ市民が中心市街地で集う街コン（街なかで行う合同コンパイルメント）の企画運営など、硬軟取りまぜて積極的に取り組んでいる。

地域企業自線での連携を期待

北見商工会議所は専務理事、事務局長をはじめ職員の方々は積極的に関外に出向き、現場の実態と課題を共有し、コミュニケーションを深め、ともに考え実践するフットワークの良い活動を行っている。自ずと地域連携の編成、運営、支援する役割を担うことが多い。一例がオホーツク観光に関わる協議会である。

商工会議所は地域経済を担う、地域振興の事業主体となる企業の組織であり、地域振興に際して先頭に立って打ち挑む組織である。最前線で後顧の憂いもなく攻め続けるためには、自治体の支援と金融機関の融資が必要となる。金融機関は民間事業経営のあり方にも精通するため、企業に対する経営ノウハウ支援も期待される。

小原専務理事、渡邊事務局長は商工会議所と地方自治体が相互に理解を深める機会を多く設け、協同して産業振興に取り組みたいと語る。時として自治体

は、地域事業者の熱心さが単に自己の利益のために支援を求めると感じてしまいう時がある。自治体には地域事業者の真意を翻訳して伝え、地域事業者には自治体の行動様式を理解して適切に支援が受けられるよう事業計画を精査し、誠実に事業実施するよう指導する。商工会議所が果たす役割は大きい。

地域金融機関に対しては資金融資に際して融資判断を企業目線で検討してもらいたいと語る。企業目線をとることができると地域金融機関は、商工会議所とともに地域事業の連携を基軸にして、地方自治体にアプローチすることこそ地域金融機関に求められるあり方だと考える。地域金融機関に期待される役割は地域の課題と展望が具体的に複層的になるほど大きくなる。お二人のお話はこのことを確信させる内容である。

(注) オホーツク地域では擦文時代に変わりオホーツク文化・トビニタイ文化の時代があり、後にアイヌ文化時代に移行する。